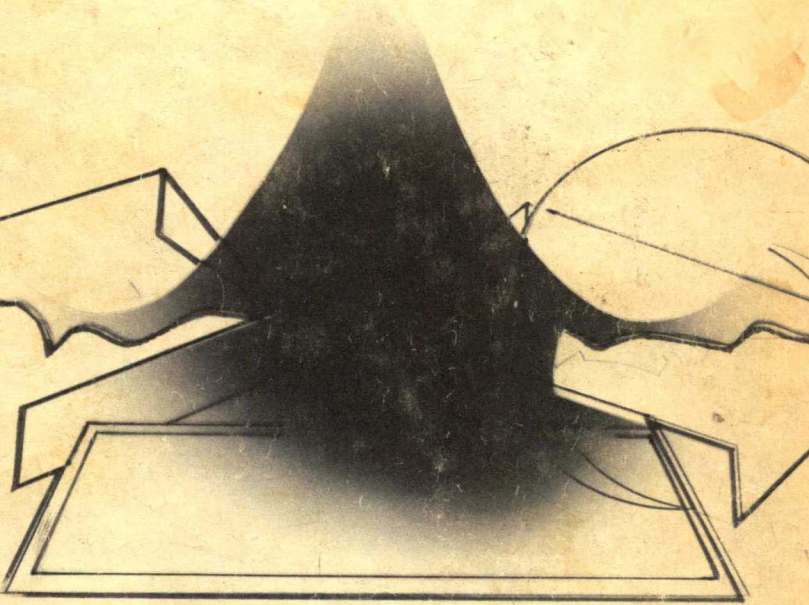
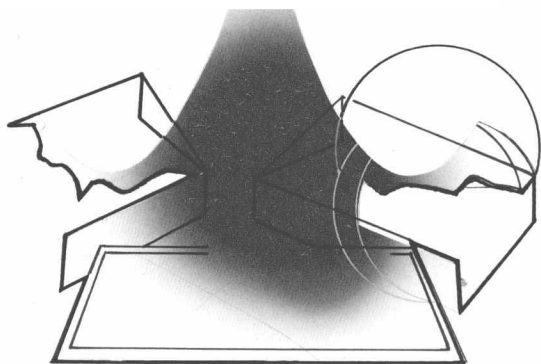




共生空間

高橋たか子



新潮社

著書

「彼方の水音」(講談社)
「骨の城」(人文書院)
「双面」(河出書房新社)
「空の果てまで」(新潮社)



共生空間

昭和四十八年十一月十日 発行
昭和四十九年八月十日 三刷

定価七八〇円

著者 高橋たか子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一
業務部(〇三)二六六五一
電話 編集部(〇三)二六六五四
振替 東京 八〇八番

郵便番号 一六二
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

《目次》

共生空間 5

西方の国 51

秘 87

遠くから来るもの 121

魔の時 147

螺旋階段 179

装帧者 中西夏之

創作集

共生空間

共生空間

微風もなく空氣がぼつてりと澱んでいた。晶子は立ち上って、窓の外に腕をつきだしてみたが、明りと闇の違いをのぞけば、室内と同じ蒸暑い空氣に触れただけだった。

「台風がきてるらしい。道理でね」

伸男が畳の上に新聞をひろげて、活字に覆いかぶさるような恰好で言った。

「扇風機はなんとかならないの？」

晶子は闇をかきまぜるようにして、窓の外で腕を振ってみた。それで風が起るわけでもない。夜干しにした洗濯物が庭のはずれで、灰白い塊となって垂れさがっている。衣服のかたちは重たそうにうなだれてみえた。

「こんな時間じゃ電気屋はきてくれまい」

伸男は新聞をたたむと、茶の間の隅へほうり投げた。二、三日分の新聞がそのままになって重なっていた。掃除を怠けてそうなっているというより、むしろ怠惰というなら、誰もがするよう毎日読まずに、それでも氣にはなって、そのうちに読もうと二、三日溜めおいてしまう癖が晶

子にはあるのだ。

「いいえ、あなたがですよ」

晶子は自分の声に、甲走った響きが混ざるのを聴きとった。

「ぼくは電気屋じゃない。そうだろ、君にだってできんことは、ぼくにもできん」

伸男は畳に仰向きにころがった。裸になればじかに空気に触れて、よけいに暑いからと言って、開衿シャツのボタンをはずしているだけである。

「すこしもやってみようとしなのね」

晶子はそう言ったが、知り合いの主婦が電気の修理は自分で全部しているのを思い出して、口をつぐんだ。窓から首をつきだして、空にかかった黄色い月を見あげた。月までが熱をおびてうるんでいる。蒸気が月のまわりで炎をたてているかのようだ。その炎は、とろとろと曖昧で、燃えたちもせず消えかかりもせず、月の顔をほてらせているだけなのだ。

「なんともばかばかしい暑さだね。頭がわるくなるようじゃないか」

「仕方がないわね。頭でもわるくなっていまするか」

晶子は茶の間をのろのろと歩き、隅に不揃いに積まれている新聞を全部かかえ取った。うつすら溜った埃のせい、さらさらした紙の感触のせい、紙の濁った色合いと活字のくろぐろした詰りかたのせい、それは厚ぼったい暑さのなかでさらに厚ぼったい体積をなしている。それを廊下のわきのところへ放りだすと、その分だけ茶の間に涼気がしのびこむかと思ったのだが、湯気と狎れ合ったような空気がわだかまっているままだった。扇風機が故障なら団扇でも取りだそ

うとしてもみない自分のけだるさと、伸男のけだるさとが立ちこめている畳に、晶子はまたのろろとうずくまった。手足がたっぷり水分をふくんでいて、鈍重な、意のままにならない道具のように感じられる。

伸男は仰向きのまま、眼をとじて、口笛を吹きだした。暑さだけがのさばっている静かすぎる宵のなかに、それは線香の煙ほどのろろさで昇っていく。五、六年前にはやった歌曲である。まだ知り合っていなかった頃の歌曲を吹きながら、何を思い出しているのか。晶子はそう思ってみたが、伸男の記憶にかかわるすべもない。だが、その歌曲は晶子の頭のなかにぼうっと灯をともし、橙いろの暈をひろげて記憶の闇を明るませていくと、ずっといっしょに暮していた姉の姿が浮かびでてきた。それを強いてまさぐり取ろうともしないままに、晶子はぼんやり姉の姿を眼でなぞった。そうしながらも同時に、伸男のほうに眼をやり、伸男の頭のなかで晶子の知らない空間が色づいているらしい様子を感じとり、それが何であるか知りようもないのにすこし苛立ち、だが伸男にしても晶子の記憶にかかわるすべはないのだと思い、そのことにもすこし苛立った。歌曲によって浮かびでたそれぞれの記憶の部分が、たがいに触れ合うこともないままに、この宵の暑気のなかで二つの物体のようにころがっている気配を、しかし晶子はそっと見つめるだけにしておいた。

門前にオートバイが止り、ポストに何かが挿しこまれる音がした。エンジンはその間もうごいていて、その威勢のいい震動音に消されそうな、速達ですよという声がし、オートバイは駆けだしていった。

伸男が立って、門へ出ていった。オートバイの音がドリルのように闇の層に長い孔をあけながら、どこまでも続いて行って、消えたかと思うと、曲り角の具合でまた微かにひびいてきて、本当に消えたらしいのに、まだ耳にのこっている余韻のためにそれがずうっと一直線につらなっていて、晶子はそんなふうにして音の駆けぬけていく道のりをぼんやり追っていた。

「藤代さんだよ」

伸男がそう言って、速達便をさし出した。

「何事でしょう、お姉さんは」

晶子は封筒を割れもののように掌にのせて、その表書きの神経質な字体をながめた。宛名は晶子と伸男の両方になっている。

「なにもそんなにいぶかることはない」

伸男はむしろ晶子にいぶかるような眼をむけた。晶子の顔こそ割れものの陶器のようにみえたのかもしれない。伸男はテーブルからコップを取りあげ、残っていたサイダーを飲みほした。生温かくなっている上に気がぬけているだろうと思いつながら、晶子は伸男の仕種を見た。

「あなたは知らないのよ」

晶子は自分がこんな手紙を手をしているというのに、生温かくなっている上に気のぬけたサイダーを飲んだ伸男に苛立った。とはいっても別に変わった封筒でもない。夏の宵のだらけた時間のひろがりのなかへ、ふいに舞い込んできた姉からの合図のようなものに、晶子は驚かされただけなのだ。

晶子は封を切った。

『明日の夕方、行きます。一晚泊めていただきます。藤代』

それだけの文面だった。片隅に二行書かれていて、便箋の他の部分には何もなく、さらに一枚重ねた便箋も余白のままになっている。

「妙だと思わない？」

晶子は仲男に見せて、妙だと思ふ理由を説明した。明日のことだから速達というのはわかる。だがこれだけの用件なら葉書でもじゅうぶんである。余白だらけの手紙、その余白の部分に、なにか面倒なものをこちらに押しつけてくるような気配があるのだ。

「めんどろなことして、たとえば金かね」

仲男は白紙のままの一枚をびらびら宙に振ってみた。

「いいえ、あの人は即物的な人じゃありません。魂そのもののような人なのよ」

晶子はその魂を面倒なものに思うのだ。

「君がほめるのかい」

「ほめてはいないわ。一度だってほめたことがあって？」

「藤代さんはどうも苦手だな」

晶子は仲男が畳の上にすべらせた便箋の、多すぎる余白の部分のなかに、藤代の震えるような魂を感じた。そう思うのはすこしも思ひすぎではない。

「いったい何をしてくるのかしら」

晶子はそう言ったが、伸男が答えなかったもので、その問いは宙に重たく浮かんでしまった。いや、むしろ藤代の存在が、二人の沈黙のなかで嵩かさばっていくようだった。その輪郭を晶子がこちら側からなぞって鮮明なものにしていると、伸男もまたむこう側で同じ操作をしているらしい。だが晶子が中をなぞっているのに、伸男は外をなぞっているにすぎないだろう。誰も、この世で誰も、晶子ほどあの人を知っている者はいないのだ。

「お姉さんにあれを言わないでね」

晶子はふいに気がついて言った。伸男は沈黙の底のほうから、不審そうな顔をゆっくり持ちあげた。ややあってその顔に気忙しげな明るみがうごいた。

「あれってまだわからんのだろ」

「まちがいないわ。昨日もすこし吐気がしたの」

晶子は喉に手をやり、仕種を真似た。

「吐いたのかい」

「私の勘はたしかよ。まだ吐きはしないけど」

軀の奥のほうから、自分ではない別なものが芽生えてくるなまなましさだけでも、孕み女が吐く理由はじゅうぶんにある。晶子はこの何日かの間そんな想いを反芻していた。

「お姉さんが知ったら、それこそよ。あの人は妬みぶかいの」

ずっと以前伸男がいない時に一度訪ねてきただけで、晶子と伸男の二人に顔を合わせることをあれほど避けてきた藤代が、それを知ったら、どんなにか痛ましいことになるだろう。痛ましい

のは藤代だが、そんな藤代を見させられる晶子自身が自分を痛ましく思うことだろう。

晶子は手紙を畳の上から拾いあげると、その筆蹟を見つめた。字劃の端々が神経の切先のように外に突きだしている字だった。いまでも藤代はそんな字のような生きかたをしているらしい。いっしょに暮していた頃は二人はよく似た字を書いていたものだ。だが世帯をもってこの三年の間に晶子の字には、のびやかさも物憂さともとれるようなものが表われてきた。その違いの分だけ晶子は藤代から遠ざかって、違った自分になったはずだった。二人の間に晶子のがわからず藤代のがわからず淵がつくられていた。たがいに文通もなかった、その三年の空白の時間を強引に跳び越えるようにして、今頃になってこんな速達便がさし向けられてくる。何のためにあの人は訪ねてくるのか。

十時を過ぎていた。あいかわらず微風もなく、すべてが生温かい蒸気をたてながら澱んでいる。故障した扇風機をかかえ持って、闇の道をどこまで駆けていっても、微風に出会うことなく、発熱したような月の黄色い顔に出会うだけだろう。孕むことがありがたいのかそうでないのか。ただ不如意な軀だけがここにあって、先のことは見通しもつかず、切りはなした過去は確かなものとしてうとましく、その過去の真只中から、あの人がくるといふ。

晶子はそんな想いの輪からすべり出るようにして、ふらふらと廊下にでた。庭のむこうの闇の奥のほうでジジと、ふいに直線的に鳴る音がしたので耳をそばだてた。ベルではない。生きものの音だ。

「何でしょう」

晶子は茶の間を振りかえった。

「蟬じゃないか」

伸男も立ち上って、窓の外を見た。

それは夜の層に長くアイロンをかけて、焦がしているような声である。右手の松林のほうから響いてくる。

「こんな夜更けに。狂い鳴きですね」

晶子は伸男のそばに寄って、窓から首をだした。

「前触れかしら」

「蟬が台風を予感するかな」

伸男が窓から離れた。

「そうじゃないの。あの人のくる前触れなのよ」

晶子は薄く笑って、そう言った。

晶子は肉屋と八百屋で買物をすませると、重たくたるんだような暑気のなかで右往左往する人の間を足早に歩いた。主婦たちが銀蠅のような眼附きになって、大きな籠に盛沢山の食糧品をかかえているのを見ると、彼女たちの隠しもっている貪欲さをみせつけられたような気がして、いつも晶子はそっと避けて通りたくなる。また肉屋で肉を一度に八百グラムも買っている主婦のそばでたまたま順番を待っていたりする時など、もう買おうという気がなくなってくることもあ

る。おそらく家族が多いのだろう。だが、その主婦がガラス・ケースに並んでいる肉と同質の塊のように思えてきて、そんな肉ならすこしも食べたくはないのである。

だが今日の晶子の買物はいつもにくらべて盛沢山になった。夕方訪ねてくる藤代の分だけ多いのだ。晶子は商店街に沿って、眼を真直にあげて歩いていった。そのずっと先には、晴れてはいるのに黄ばんだような空があり、蒸気を孕んでぼうっと膨らんでいる。主婦たちの蒸暑さから足早に逃れてきたのに、前方にもまた蒸暑さを押しつけてくる空の色合いが立ちほだかっていた。台風はまだきそうにない。テレビによれば明日の午後に直撃してくるらしい。

晶子はふと右がわに眼をやった。果物屋があった。一度も入ったことのない店である。だが、そこに並んでいる桃がなんということもなく味覚をそそり、買う気になった。昨夜と同じような無風状態が予想される今夜の時間のなかに、その桃を、絵のなかの一箇の静物のように、想像上で置いてみると、なにか涼気が感じられた。六つ買って、店を出た。

右手の籠は一杯だから、桃のはいった紙袋を左手でかかえて歩きだすと、ふいにその重さが異物のような、坐りのわるいものとして意識された。なぜなら晶子も仲男もあまり果物を食べる習慣がなかったからである。それに晶子は子供のころに桃で下痢を起してからは、みずから買って食べたことはなかったのだ。バスの停留所まで歩き、バスに揺られている間に、しかし左手のその異物感はいつの間にか薄らいでいて、甘ずっぱい爽やかな匂いが鼻先にたえまなく立ち昇っていた。その仄かな匂いをたぐり寄せるふうにしていくと、眼の前に果物屋の店頭が浮かんできた。しろっぽい桃が大きさによって値段の区分けがされていて、小から中から大へと、売棚のゆるや